

福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み(3)

守山 恵子・二階堂 整

はじめに

メディア・コミュニケーション学科の1年生必修科目、入門ワークショップⅠ、Ⅱでは、大学で必要とされる論理的な文章が書けるようになることを目標に授業を続けている。2013年度、2014年度の授業についての報告と検証は、それぞれの年度の『紀要』紙上で行ってきた(二階堂・守山 2014, 守山・二階堂 2015)。本稿では、それらの検証に基づき改善を行った2015年度の授業について、報告と検証をする。特に、1年間のカリキュラムの後半部分である後期の授業に焦点を当てる。

小論文を書くために、前期には、学生が形式的なことがらを理解し身につけることができるように、課題を設定した。後期には、その前期の学習を基礎とし、学生がクラスごとに決められたテキストを読み込み、資料を探し、テキストのテーマに関連して自分の主張を展開することができるよう、順序立てて授業を組み立てた。この授業の報告と検証を通して、初年次教育で、どこまで何をおさえることができるか、また、必要かについて考えたい。

1 2015年度の初年次教育

2015年度の初年次教育では、2014年度に行った5つの改善をほぼ踏襲した。

その5つは、①ペア及びグループ学習増（漢字テスト作成含む）、②テキストの変更、③練習問題増、④前期小論文の課題の題を複数から一つに、⑤使用教材のファイリング方法の変更である（守山・二階堂 2015）。そのうえで、前年度の検証に基づき、改善を行った。なお、本稿での学生による授業内容の評価は、前期最終回と後期第13回目に行ったアンケート調査結果（資料1、資料2）による。

1-1 前期の改善点

(1) 漢字テスト

漢字テストは、前年度と同じように、学生それぞれが作成してきた漢字テストを授業時間の初めに交換して解答し、採点する方法を採った。変更点は、出題範囲を毎週行っている時事ワークシート^(註1)からとしたことである。時事ワークシートは、1回に1枚を課題として配布した。その翌週の授業の最初に、解説付き解答を基に自己採点し、さらにその翌週に、解説を含む範囲から15題の漢字テストを作成してくることとした。前年度、「漢字テストを作るのは面倒だった」という学生の声があったことから、出題数を5題減らした。また、毎週の課題である時事ワークシートからの出題とすることによっても、学生の負担が減った。前年度は、テキストの10ページ前後を出題の範囲としていたからである。時事ワークシートで漢字テストを作ることにより、学生は時事ワークシートを複数回読むことになり、内容の理解が進むことも期待できた。出題範囲が時事ワークシート1ページ分だったことから、不満を感じている者もあった作成者による難易の差も、前年度ほどではなくなった。この方法を後期まで続けた。

(2) 小論文とピア活動

前期小論文の課題題は、前年度の「学食の箸はプラスチック箸がいいか、割り箸がいいか」から、「大学は制服を採用すべきか、否か」に変更した。変更理由の一つは、参考にするべき書籍や論文がより入手しやすいものにしたということである。また、より身近に自分の問題として考えることができ

る題材にしたいと考えたからである。比較的書きやすいと考えた学生が多かったことが、前期の最後のアンケートからわかった。

ペアやグループでの小論文の読み合いは、前年度同様「小論文を読み合って、気づくことがあった」とする学生が6割を超え、否定的だったのは1名にすぎなかった。全員が履修する他の授業でも、グループでの話し合いや活動が取り入れられており、多くの学生は、お互いが助言しあうことなどに抵抗が少ないのではないかと思われた。前年度から使い始めたホワイトボードは、使用場面を増やすことができ、前年度に比べ「話し合いに役に立った」と評価する学生が増えた。ただ、グループ活動が苦痛の学生に対する対応に課題が残っている。

(3) テキストとマップ

テキストは、前年度に使用した教員自作のテキストを改良し使用した。前年度の反省を生かし、解説部分と練習問題とを分けて作成した。また、前年度は、印刷面を見開きの右ページのみとして、左ページをメモに使えるようにしたが、行間などのスペースを広くとることで、メモを記入する場所が確保できると考え、両面印刷とした。内容の点では、説明の分かりやすさにさらなる工夫が必要であり、また、読みやすさ、構成にも改善できることがある。

『テストの花道』(NHK)の使用は、前年度は、授業時間以外に時間をとることができたが、今年度は時間に制約があり、授業中に参照させる程度にしか使うことができなかった。そのため、考えを整理分類する方法をいくつも体験させることはできなかった。しかしその分、マップを繰り返し利用し、定着させることができた。定着したことは、後期に、ごく自然に話し合いにマップを利用する様子が見られたことから明らかである。

(4) eラーニング

2015年度前期の最も大きな変更は、大学eラーニング協議会の「共通基盤教育システム」を利用したeラーニングを取り入れたことである。これまで、他のeラーニングを取り入れたことがあるが、自発的に取り組ませることが

難しいと感じていた。しかし、14年度に試験的に学生たちに「共通基盤教育システム」を使わせてみたところ、比較的抵抗なく課題に取り組んでいる様子がみえた。そこで、今年度は、コンテンツの中から、「キャリア支援」「言語（日本語）」の「語義」「四字熟語」「成句」「表記・文法・敬語」「短文読解」「ことわざ」「文章の体裁・表現」の各問題を課題とした。前期中に終わらせることを課題とし、学期途中で2回、成績のよい学生に賞品を出し、学生がモチベーションを維持続けることができるようにした。在学する51名中48名の学生が、課題のすべてを終了させた。36名の学生が全問正解になるまで課題に取り組み、残りの学生も9割以上の正答率になるまで課題に取り組んだ。問題の難易度が学生にとって適当であったと考えられることや、やり直しがしやすかったこと、空き時間に数問でも先に進むことができたことなどが、高い取り組み率につながったのだと考えられる。今後は、このコンテンツを漢字テストに利用するなどの他学の取り組み^(注2)も参考に、効果的な利用を続けたい。

1-2. 後期の取り組み

後期は、前期で学んだ論理的な論文の書き方を活かして、一つのテーマについて、まず基本となる情報を読み込み、グループで話し合い、発表を繰り返して、最後に各自が1,200字で論文を書くという流れで授業を展開した。

(1) テーマ（岩波ブックレット）

後期は、基本となる文献や資料を読み込むことからスタートしたいと考えた。13年度から、後期には岩波ブックレット（以下、ブックレット）を利用している。本年度も引き続き、ブックレットを採用した。選択の際には、以下の①～⑥を基準とし、岩波ジュニア新書を含む新書やその他の書籍も検討の対象としたが、結果として、ブックレットを選択した。①テーマが明確で、テーマについてのある主張が展開されている。②学生が経験をしてきたことである、あるいは自分の問題として考えることができるテーマである。③テーマについて、抽象的な話だけではなく、具体的な情報が含まれている。

④テーマについて、話を展開するための根拠となる論文や書籍を含む様々な情報を手に入れやすい。⑤3クラスがそれぞれに違うテーマを取りあげることにするため、同程度のを3冊選択できる。⑥最初から最後まで、あまり時間をかけずに読み切ることができる程度の分量である。ブックレットの場合、一度に全部を読んだ学生は、2時間以内で読めたようだ。

今年度使用した3冊は以下の通りである。牧下圭貴著(2009)『学校給食－食育の期待と食の不安のはざままで』、柳瀬洋介他著(2015)『小学校からの英語教育をどうするか』、佐藤学著(2004)『習熟度別の何が問題か』。ブックレットはA5サイズで、それぞれのページ数は71ページ、64ページ、70ページであり、文字数は4万～5万字程度である。

ブックレットを読む前に、学生たちがそれぞれのクラスのテーマに関心を持ち、自分の持っている経験や知識に気づき、考えるきっかけを得ることができるよう、各クラス担当教員がテーマについて話題提供をした。同時に、各テーマについてアンケート調査(資料3)も実施し、学生たちはそれらの結果をその後の話し合いや発表に活かすことができた。

(2) 要約

要約については、前期中に「要約とは」「要約の方法」について説明を行っていたが、再度、Master of Writing^(註3)を使い、3クラス合同で確認した。その後、要約の活動はクラス単位で行った。『学校給食』を使ったクラスの活動は、以下のように行った。

ブックレットを丁寧に読まなければならない状況を作りだし、内容を十分に理解するため、2回の要約作業を取り入れた。1回目は、ブックレット全体を読んだのち、各章の位置づけを考えて、担当する1章を200字で要約するというものである。1章は20頁前後で、文字数にすると1万字前後である。クラスを3つのグループに分け、そのグループの中でそれぞれの章の担当者を決め、要約をしていくこととした。授業では、まず、クラス全体で、各章の要約の発表を聞いた。1章につき3人ないし4人が要約を発表した。このことを通して、学生は、200字でも十分内容がわかることや、人によって取

り上げる部分が違うことなどを知ることができた。また、数人の同じ章の要約を聞くと、その章の全体がよくわかることから、テキスト全体を考えた時に、どこを取り上げておくことが大切かを考えるきっかけになった。

2回目の要約は、ブックレット全体の400字要約である。まず、グループ単位で、ホワイトボードとポストイットを使用して各章の重要なことがらを書き出し、テキスト全体の話の流れや400字にするのに残したい部分と不要な部分について話し合いを行った。どのグループも、ホワイトボードを囲んで立ちあがって熱心に話し合いをした。誰もが責任を持つ章があり、その章については一番よくわかっていることから、1人1人が話し合いに欠かすことができない存在であった。最後に、他グループのホワイトボードを見てまわり、自分のグループとの違いを見つけたり、質問しあったりして、グループを超えて自然に話し合いが始まった。ホワイトボードを使うと、紙媒体を使うよりも全員が話し合いを共有しやすい。また、話し合いのいくつかの段階で撮影記録し、他のグループのホワイトボードも撮影比較するなどが簡単にでき、記録の点でも問題がなかった。

他のクラスでは、グループのうちの一つにのみ、教員がテキストの要約を前期学んだ小論文の枠組み（序論・本論・結論、ナンバリング、ラベリングなど）にあてはめて書くように指示した。そのグループの要約と、他のグループの要約を比較することにより、前期学んだことがつながり、生きてくるということを伝えるためである。小論文の枠組みについては、全体でもクラスでもこの後もしばしば話題にした。

400字要約は、話し合いをもとに翌週各人が書いてきたものをグループ内で読み合い、最もよいものを1つ選び、グループ全員で選んだ要約に必要な手直しをした。その後、各クラスから1グループずつ計3グループが集まり、他クラスの学生にブックレットの内容を伝えるために、それぞれのグループが400字要約の発表を行った。

(3) 口頭発表

2回の要約を通して内容を理解したうえで、テーマについて、対立する意見Aと意見Bのそれぞれを主張する発表活動を以下のように行った。

① クラスで教員が、意見Aと意見Bの論点の確認、内容理解のための補足説明、いくつかの参考文献の紹介を行う。

② グループで、誰の立場で意見Aを主張するか、どんな理由が考えられるかを話し合う。話し合いにはホワイトボードとポストイットを使用する。

③ 各自が、意見Aを主張するための理由を考え、その根拠となる資料を探して持ち寄る。

④ グループで、持ち寄った資料をもとに話し合い、発表の準備をする。グループで発表者を決め、発表者はレジュメ作成も担当する。

⑤ 各クラスで、グループごとに意見Aの主張をする発表をする。各人が発表についての気づきやコメントをまとめ、グループ単位で振り返りと改善を行う。

⑥ 各クラスから1グループずつの3グループが集まり、それぞれの発表を行う。

⑤でクラス内で発表を行わせたのは、テーマについてよく理解している仲間の前で発表し、同じテーマの発表を複数聞くことにより、学生が比較をすることができると考えたからである。同じ意見Aを主張するにしても、立場が違えば理由も根拠も違うことや、同じ立場であっても、重きを置くことに違いがあることに気づき、より説得力のある理由と根拠は何かを再度振り返って考えたりするきっかけになる。次に、⑥の他クラスのグループの前での発表では、意見Aの主張の前提となっていることがらをどこまで説明しなければならないかを考えたり、わかりやすくするために、理由の提示順序を変更したりすることが必要になる。さらに、⑥では、他のクラスの発表から、学生たちは、根拠資料としてどのようなものが使えるかがテーマによって違うこともあることに気づくこともできた。

意見Aでの②～⑥までを行い、意見Bでの②～⑥を行い、さらに、それら

の経験から、グループとして、どちらかの意見での最終発表を行った。最終発表は3クラス合同で、各グループが全体の前で発表をした。

(4) レジюме

(3)の活動のために、レジюмеの作成を学んだ。Master of Writing と上級学年がゼミでの発表のために作成したレジюмеを参考資料とした。

レジюмеは、話を聞く相手に発表内容をよりよく理解してもらうためだということを考え、そのことに配慮して作成することが求められるが、学生にとって、よいレジюмеを作るのは、要約や400字小論文を書くことよりも難しかったようである。発表する文言をほぼそのままレジюмеに載せたり、反対に、単語の羅列にすぎなかったりすることも多かった。しかし、学生たちは、自分たちのグループのレジюмеを含め、合計で27のレジюмеを手にしたことになり、視覚的にどのようなものが見やすいか、話を聞くときに、何がどこまで書いてあればわかりやすいか、どのような発表にどのようなレジюмеが適当か、参考文献の書き方はどうすればたどりやすいか、などに気づくことができた。また、細かなことでは、カラー印刷と白黒印刷の違いや、5分程度の発表に、数ページにもわたるレジюмеは適当ではないことなどにも気づけたようである。

(5) アウトライン

アウトラインは、聞く人のためのレジюмеに対して、自分自身のためである。アウトラインがしっかりできていれば、発表原稿を準備することも、小論文を書くことも、レジюмеを作ることも難しくない。

後期の最後の課題である1,200字小論文を書く前に、「序論、本論、結論」を書き入れるA4用紙を配布し、Master of Writing や前期のテキストなどを参照して、アウトラインを作成していただくことを課題とした。授業でアウトラインについて例を示して再度説明と課題練習をし、それをもとに、アウトラインを書きなおしてくるよう指示した。一度自分の考えで書いてみたうえで説明を聞いたほうが、気づくことがあるだろうとの考えからである。また、レジюмеを作成した経験も生かしてアウトラインを作成することにより、本

来は、アウトラインがあつて、レジユメを作成するという順序を逆にすることにはなるが、学生にとっては、かえって、アウトラインを作成しやすいのではないかと考えた。学生たちは作成に戸惑いはなかったようだが、教員が求める水準のアウトラインにはなかなかならなかった。それは、多くの学生が、レジユメよりむしろ簡単なアウトラインを作成して満足してしまっていたからである。「自分のための簡単なメモ」程度のもので構わないと感じた学生がいたのは、レジユメを先に作らせたからかもしれない。この点は、検討すべき課題である。

(6) 1,200字小論文とチェックシート

後期の1,200字小論文は、学期を通してブックレットを読み、話し合いと発表をし、発表を聞くことを繰り返し、テーマについて理解と考えを深めてきたことを活かして、学生各自が取り組んだ。

アウトラインができれば、小論文が書けたも同然だと言いはしたが、学生が「アウトラインができた」と思っている、そのアウトラインがアウトラインになっていないと、「書けたも同然」にならない。そこで、前期に使用していた小論文チェックシートを見直し、形式のチェックの前に、内容のチェックができるようにすることにした(資料4)。また、書き終わってチェックするためのシートを、書き始める前にも使い、それが、アウトラインにもなるようにした。項目は、以下の通りである。チェックシートではあるが、チェックするのではなく、各項目の質問に、文で答える(説明する)こととした。

1. 主張したいことは、何か。
2. 誰の立場で主張するのか。
3. 論点(理由)は何か。いくつあるかがわかるように書かれているか。
4. それぞれの根拠は何か。どの理由に対応する根拠かが明らかになっているか。
5. 根拠について、十分な説明をしているか。根拠は根拠足り得ているか。
6. 考え得る反論とそれに対する反駁は何か。
7. 序論と結論にどんなことを書いたか。それには矛盾はないか。

- | |
|---|
| 8. 参考資料、参考文献はいくつか。それぞれについて、必須情報を正確に記載しているか。 |
|---|

チェックシートは、小論文評価のポイントでもあることを説明し、漏れないように記入することを必須とした。

2. 今後の検討課題

2-1 テーマ選択

学生の興味関心を引き出すことができるテーマ選択に難しさがある。前年度に、自分たちの問題として捉えるのが難しい内容だったため興味が持てない学生がいたことから、身近なことがらをとりあげることにした。しかし、身近であっても、そのことを考えることにおもしろさを感じられないようなことも少なくない。身近なことがらだから興味関心が持てるとは限らない。どのように学生の興味関心を喚起するかは大きな課題である。興味関心を引き出すことができれば、全く知らないことがらに取り組みせることもできるだろう。学生たち自身が、あまり興味関心がもてないことがらであっても、おもしろがって取り組めるようにするには、どうしたらいいかを見つけることも必要であろう。

今年度は、興味関心をいくらかでも引き出すために、最初に、教員からの話題提供とテーマに関するアンケート調査を行った。これらは、その後の発表にアンケート調査結果を利用するなどが見られ、一定の効果はあったが、さらに、テーマについて考える土壌を醸成しておく方法が必要だと思われる。テーマについて考える必然や面白さを学生が感じることができ仕掛けを工夫したい。

2-2 アウトライン作成とレジュメ作成

学生は、前期には、「大学も制服を採用すべきだ」「大学は制服を採用すべきではない」という400字小論文を繰り返し書き、お互いにチェックしあう

活動を通して形式と内容の改善をした。前期の最後には、1,200字小論文を「大学は制服を採用すべきか否か」で書いた。学生は、アウトラインについても多少は学んでいたが、1,200字小論文を書く際に、教員からアウトラインを書くことを強く勧めることはなかった。

後期には、400字小論文を書く活動は行わず、テーマについての話し合いと発表を繰り返し行った。そのまとめとして1,200字小論文を書くにあたって、アウトラインの作成をした。その際、アウトラインを書くために必要なことがらをひとつひとつチェックする道筋を経ることが必要だと思われた。本年度は、そのためにチェックシートを改良し、利用した。最終的には、7割を超える学生が、「レジュメの作り方がわかった」「アウトラインの作り方がわかった」と答えており、さらに9割近い学生が、「アウトラインは小論文を書くのに役に立つ」と気づいている。今後、アウトラインとレジュメを作成するための手順をどのように踏めば、「アウトラインができれば小論文が半分以上書けたも同然」を学生が実感し、丁寧な道案内がなくてもアウトラインを書くことが必要だとわかって書くことができるようになり、他の科目の課題や卒業論文に活かすことができるようになるか、さらに検討したい。

2-3 ピア活動

後期の授業では、ピア活動を活発に行うことができたと考える学生が8割を超えているが、ピア活動が苦手な学生もわずかだがいる。それらの学生の中には、後期途中から欠席がちになる者もあり、対応の検討が必要である。出席していても、この授業を「役に立たない」と強く思っている学生も1名いることがアンケートからわかった。

今後もピア活動を取り入れた授業展開を行うが、学内の他学科や他学での取り組みも参考に、この活動に苦痛を感じる学生へ十分な配慮をしたいと考えている。

2-4 参考文献などの資料の使い方

最後に、学生が主張の根拠として、資料を引用する場合の問題を取り上げたい。学生がやりがちな問題や注意すべき点などを示し、今後の指導の参考になればと思う。具体的には「小中学校における習熟度別教育に賛成か、反対か」という課題レポートの例をあげる。この場合、習熟度別教育とは、複数担任制・少人数教育とは別であることを前提とする。また、学生には、執筆の際に誰（生徒・教員など）の立場からかも明記するようにさせた。基本図書は『習熟度別指導の何が問題か』（佐藤学 2004 岩波ブックレット）であり、クラス全員が購入した。

後期は1200字のレポートを書くことが最終課題であるが、(前述のように)それまでにグループ活動の中で、「習熟度別教育の賛成・反対」のそれぞれの立場で、アイディアマップを使いながら理由を考えさせたり、両方の立場でレジュメを作成し、グループ発表させた。

レポートにおける引用文献利用の際に起こった問題について、ケース分けして述べていく。以下、賛成・反対とは、習熟度別教育に賛成・反対の意味である。

(1) 資料の不足

賛成の立場で、学力の向上を理由にした際、小学校教員の実践報告論文を引用文献としながら、単に「A小学校の習熟度別教育で算数の得点が上がった」とのみ、述べて終わる場合が少数ながら、あった。次の段階としては、同じ文献を使って、テストの得点が全国平均より上であるグラフのみを示して、根拠資料とする場合があった。具体的資料が示されている点はよいが、習熟度別教育を行わない場合がどうなのか示さねば、意味がない。引用元の報告では、前年度、機械的に振り分けた小人数授業を行い、その際のテストでは全国平均とそう変わらなかった資料がグラフとともに示されていた。その点について、全くふれていないものが、かなり見られた。

(2) 不十分な説明

根拠として、賛成の場合、例えば、「習熟度別教育がいい」と回答する生

徒の割合が高い円グラフを資料として示すのみで終わり、こういった生徒にどんな内容でアンケートをとり、人数は何人であったかを説明しないままであることがあった。

また、点数向上の資料でも、高校の場合を引用するケースがあり、小中学校における教育の論拠とするには問題があると思われるものもあった。

(3) 引用・要約の不適切

引用・要約する場合、文章の末尾に「…という結果となった(田中2010)。」などと示し、どこまでが該当する箇所かは明示できていたが、どこからが引用・要約の開始なのか不明確なものが散見された。

(4) 不適切な資料

特に反対の立場の資料に目立ったものだが、引用論文から「生徒の意識低下」という記述や「点数に向上がみられない」グラフを引用する場面があったが、元の論文は、基本的に習熟度別教育を肯定する立場から執筆したもので、問題点を指摘しつつ、その原因を探り、習熟度別教育の方法の改善策を述べたものであった。その問題点の箇所の記述や資料のみを抜粋して記載している場面があった。

(5) 孫引き

文部科学省の資料を参考にしつつ執筆した参考論文の中から、文部科学省のある調査結果の要約の部分を抜粋することで終わらせる場面があった。そのもとの文部科学省の調査では、小学校で習熟度別教育が25%程度しか実施されていない時期の全国調査であるため、反対の立場の論拠としては適切でないものであった。原典にあらず、いわゆる孫引きによって、起こった問題である。

(6) 資料の読み込み不足

文部科学省の調査結果を引用したレポートにしばしば見られたケースだが、継続調査の一部を抜粋したり、冒頭の結果の要約部分のみを引いてきたりする場合があった。そのため、調査全体としては成績向上が見られる内容なのだが、一部効果あまり見られない資料だけに目をつけて抜粋したものが

あった。さらに、冒頭の要約だけを見て、生徒が習熟度別教育に「好印象」を抱くとの記述を引いてきて、「生徒が習熟度別教育を好んでいる」との論拠にすることがあった。文部科学省のものと資料の後半の記述を読めば、「好印象」とは「好き・大切・よく分かる」などの肯定的回答のことを指していることがわかり、単純に「生徒が好む」との論拠にはならないことがわかるのであるが、そこまで読み込んでいないようである。

(7) 問題点の原因と対策

結果として、ネットからの引用がほぼすべてで、本を引用し、参考文献にしている学生はまれであった。後期授業開始に当たり、関係する書籍は大学図書館に揃え、学生にも伝えたが、手に取るに至らなかったようである。

そのネット利用も、極端な場合、学生はネットのキーワード検索で上位にヒットしたページにアクセスし、スクロールしながら、目についた都合のいい資料を抜粋するという作業を行っていたのではないと思われる。資料の論文全体を読み通していないため、結果として不適切な引用になったと思われる。

以上、資料の問題点ばかりを指摘してきたが、逆に言えば、学生のレポートにおいて、資料を問題点として取り上げることができるほど、学生の力がついたとも見ることができるとも考えている。レポートの枠組み（序論・本論・結論やナンバリング・ラベリング、根拠資料の提示など）になっているからこそ、学生の主張の流れも理解でき、それゆえに、論拠の問題点も目に付いたのである。引用資料に問題があることも、レポート末尾を見れば、引用文献がどんなページで URL とアクセス日まで表記しているからこそ、資料の不適切性を教員の側で指摘することができた。学生が明らかに進歩している点は、ここに記しておきたいと思う。

振り返れば、要約・引用の不適切さも、1200字に収めるための苦労の現れかもしれない。この点に関しては、単に形式的なことだけでなく、なにが重要かをよく考えさせる引用・要約の訓練が必要と感じている。資料調査ももう少し、自分の論点において、どんな資料が有効か、どう引用するかを考え

させてからの資料探索をさせるべきであったと反省している。

おわりに

入門ワークショップでは、「大学で学ぶのに必要な論理的思考力と論理的表現力の基礎を養う」ことを教育目標としている。学生たちは、大学入学以前に、「どう思うか」を問われることはあっても、「どう考えるか」を問われることは限られていたようだ。「なぜそう思うのか」と問われると、主観的なことが理由になりがちなことから、客観的な根拠にもとづいて理由を述べることに慣れていないことがわかる。そこで、何が客観的な根拠だと言えるのかを判断する訓練が必要である。本稿でも述べたように、ある論題についての資料や参考文献を集めるところまではできても、それらをどのように扱い、どのように示せば説得力を持つといえるかには、なかなか到達できなかった。それでも、繰り返し教員からの指摘を受けたり、ピアで話し合ったりすることを通して、学生が「思う」ではなく、「考える」ことをし始めた。そして、どのような条件を満たせば、「客観的な根拠」だといえるかを、考え始めた。

初年次教育は、思考力と表現力の土台を耕し、土づくりをするときである。表面が固く、鍬がなかなか入らないような土であっても、むしろそんな土だからこそ、あちらこちらからの強さや形の違う鍬の刺激で多少表面が崩れ始めると、そのあとは早い。耕している途中に石があることもあるが、初年次教育でしっかりと耕しておけば、その後の大学生活では、そこに新たな種を植えるだけでよくなるはずである。

学生自身が、なぜそう考えるのかということ順序立てて相手に伝えることができる方法を手に入れることができれば、初年次教育の役割の一端を果たしたことになるだろう。さらに、初年次教育を初年次教育で完結させてしまわず、上級学年へ確かにつなげる必要もあろう。今後、本稿で述べた課題に取り組みつつ、上級学年へのつながりの強化をあわせて考えていきたい。

注

- 1 朝日新聞時事ワークシート (<http://mana-asa.asahi.com/worksheet/>) を大学で契約し、本授業では、「週間トップニュース」を使用している。
- 2 愛知大学，地域政策学部での取り組み。(中崎温子氏よりの2015. 11. 4 付けメール)
- 3 立教大学，大学教育開発・支援センター，電子版リーフレット (使用連絡済)
(<https://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/journal/leaflet/>)

参考文献

- 二階堂整・守山恵子 (2014) 「福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み」『福岡女学院大学紀要 人文学部編』第24号 pp. 105-120
- 守山恵子・二階堂整 (2015) 「福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み(2)」『福岡女学院大学紀要 人文学部編』第25号 pp. 33-52

資料 1：前期アンケート結果 アンケートには51名中45名が回答

質問	回答数				
	まったく そう思わない	そう思わない	どちらでも ない	そう思う	とても そう思う
①漢字テストを作る方が、テストを受けるだけより力がつく。	1	2	8	25	9
②漢字テストは作るのが面倒だった。	3	4	15	16	7
③時事ワークシートで、知識が増えた。	0	2	14	24	5
④時事ワークシートで、興味関心が広がった。	1	6	16	16	6
⑤時事ワークシートは難しすぎた。	1	15	19	7	3
⑥小論文を書くときに守るべき形式的なことがらがわかった。	0	0	8	28	9
⑦チェックシートは役に立った。	0	4	18	21	2
⑧パラグラフが理解できた。	0	8	13	23	1
⑨マップはこれからも使うと思う。	0	9	16	18	2
⑩情報を探し、論文に活かす方法がわかった。	0	1	10	26	8
⑪「根拠」を考えたり見つけたりするのが難しかった。	0	0	7	21	17
⑫400字で小論文を書くのは、難しかった。	1	7	11	22	4

福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における
初年次教育の試み(3) (守山・二階堂)

⑬1200字で小論文を書くのは、難しかった。	0	2	3	18	19
⑭ <u>Master of Writing</u> はこれからも役に立つと思う。	0	0	12	25	8
⑮『テストの花道』は参考になった。	0	4	15	20	6
⑯DVD (動画) 教材はわかりやすかった。	1	5	19	18	2
⑰ホワイトボードは話し合いに役に立った。	1	3	15	19	7
⑱お互いに小論文を読み合って、気づくことがあった。	0	1	13	29	2
⑲グループやペアでの活動がもっと多い方がいい。	1	2	19	14	9
⑳入門ワークショップⅠは役に立つ授業だと思う。	0	4	14	23	4

資料2 後期アンケート結果 アンケートには52名中41名が回答

質問	答え				
	まったく そう思わない (しなかった)	そう思わない (しなかった)	どちらでも ない	そう思う (した)	とても そう思う (よくした)
①漢字テストを作る方が、テストを受けるだけより力がつく。	1	0	10	25	5
②漢字テストは、前期に比べ、作るのに慣れた。	0	1	5	17	18
③時事ワークシートで、知識が増えた。	0	2	9	25	5
④時事ワークシートで、興味関心が広がった。	1	2	18	18	2
⑤時事ワークシートは、今後取り組みたい。	2	7	20	11	0
⑥後期の発表の準備や小論文を書くときに、前期のテキストを見た。	0	3	8	18	12
⑦グループで、他の人の考えから学ぶことがあった。	0	1	4	19	17
⑧グループやペアの活動を活発に行なうことができた。	0	1	6	25	9
⑨ホワイトボードは話し合いに役に立つ。	2	2	16	15	6
⑩レジュメの作り方がわかった。	0	1	8	29	3
⑪アウトラインの作り方がわかった。	0	1	11	26	3
⑫アウトラインは、小論文を書くのに役に立つ。	0	2	3	27	9
⑬自分のクラスの他のグループの話し合いの内容を聞く機会や、発表を聞く機会があつてよかった。	0	1	5	25	9
⑭他のクラスのグループの発表を聞く機会があつてよかった。	0	1	8	24	8

⑮ブックレットは繰り返し読んだ。	0	4	17	15	5
⑯ブックレットのテーマに興味を持てた。	2	7	17	11	4
⑰ブックレットは、3クラスとも同じ方がいい。	3	7	18	8	6
⑱1,200字小論文は、立場は決めやすかった。	2	3	15	16	5
⑲1,200字小論文は、理由は決めやすかった。	3	4	17	11	6
⑳1,200字小論文は、説得力のある論理的な論文になったと思う。	3	4	18	13	2
㉑必要な参考文献や資料は、見つけやすかった。	4	7	17	12	1
㉒入門ワークショップは役に立つ授業だと思う。	1	0	14	21	5

資料3 テーマについての事前アンケート例

15 後期 入門 WSⅡ 初回アンケート 学校給食に関するアンケート

1 あなたのクラスは ()

2 - 1 あなたは、小学校で、完全給食でしたか。
A はい B いいえ () のみ)

2 - 2 小学校の給食は、自校方式でしたか。センター方式でしたか。
A 自校方式 B センター方式 C その他の方式 ()
D わからない

3 - 1 あなたは、中学校で、完全給食でしたか。
A はい B いいえ () のみ)

3 - 2 中学校の給食は、自校方式でしたか。センター方式でしたか。
A 自校方式 B センター方式 C その他の方式 ()
D わからない

4 あなたは自校方式とセンター方式のどちらがいいと思いますか。
A 自校方式 B センター方式 C どちらもいえない
それはなぜですか。
()

5 小・中学校での学校給食はあった方がいいと思いますか、不要だと思いますか。
なぜそう思うのかも含め、考えを書いてください。

福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における
初年次教育の試み(3) (守山・二階堂)

資料4 最終小論文用チェックシート

15年度メディア・コミュニケーション学科
クラス() 番号() 氏名()

論文チェックシート(後期1,200字用) 小論文と一緒に提出のこと。

小論文題
: _____ 月 日 提出

1. 主張したいことは、何か。

2. 誰の立場で主張するのか。

3. 論点(理由)は何か。いくつあるかがわかるように書かれているか。

① _____ ② _____

③ _____ ④ _____

4. それぞれの根拠は何か。どの理由に対応する根拠かが明らかになっているか。

① _____ ② _____

③ _____ ④ _____

5. 根拠について、十分な説明をしているか。根拠は根拠足り得ているか。

① _____ ② _____

③ _____ ④ _____

6. 考え得る反論とそれに対する反駁は何か。

反論: _____ 反駁: _____

反論: _____ 反駁: _____

7. 序論と結論にどんなことを書いたか。それには矛盾はないか。

序論 _____

結論 _____

8. 参考資料、参考文献はいくつか。それぞれについて、必須情報を正確に記載しているか。

書籍の場合は、著者、出版年、本のタイトル、出版社、論文の場合は、収録雑誌名とページも。インターネット上の情報の場合は、ウェブサイトのタイトル、(作成者)、URL、アクセス日

9. 以下、形式に問題はないか。

各問いに必ず答えること。例：漢字の見直しを行い、誤字のないことを確認した。

① 漢字は楷書で書いたか。誤字はないか。

② 「だ」「である」体の常体文になっているか。「です・ます」は使ってはいけない。

③ 話し言葉（「でも」「だって」など）が混じりこんでいないか。

④ 略語など（テレビをTVなどとする）を使用していないか。

⑤ 「・」「、」「。」は1マスとっているか。特殊な記号（！や？等）を使っていないか。

⑥ 体言止めを使っていないか。

⑦ すべての文、それぞれの初めと終わりが、適切に呼応しているか。

⑧ 読点（「、」）が多すぎたり、少なすぎたりしていないか。

⑨ 改行は何回行っているか。改行が多すぎたり、少なすぎたりしていないか。

⑩ どんな接続詞を使ったか。それぞれ適切に使われているか。

⑪ 書き終えた後、何回声に出して読んで点検したか。

⑫ 科目名（入門ワークショップII）、小論文題、学籍番号、氏名、提出年月日を書いたか。
